北海道カナダ協会会報

メープル

HOKKAIDO-CANADA SOCIETY

NEWSLETTER
MAPLE
MARCH 2009
第78号
平成21年3月31日発行

カナダ・キャンベルリバー市訪問団のバグパイプ演奏
2008年9月19日石狩市において開催の第124回カナダスクール交歓会

●目　次●

◇平成20年度定時総会 …… 2
◇カナダ・スクール　第120回～第127回／CANADA SCHOOL …… 3
◇第17回北海道・カナダ姉妹都市会議 ……26
◇第17回北海道・アルバータ州姉妹都市連絡会議 …30
◇カナダ・インポートフェア開催 ……30
◇「カナダ留学フェア」開催／STUDY IN CANADA FAIR ……30
◇「カナダワーキングホリデーセミナー」開催 ……31
◇さっぽろ市民カレッジ　(2008年秋期) ……32
◇私とカナダ／Essays from Canadian Friends ……33
◇カーリング ……40

北海道カナダ協会事務局
〒060-0042 札幌市中央区大通西4丁目1番地
道銀ビル別館8F
TEL(011)233-1003　FAX(011)221-0481
ホームページ：http://www.lilac.co.jp/maple/
E-mail：h-canada@f2.dion.ne.jp

HOKKAIDO-CANADA SOCIETY
HOKKAIDO BANK ANNEX BLDG., 8F,
ODORI NISHI 4-chome, CHUO-ku, SAPPORO,
HOKKAIDO, JAPAN 〒060-0042
PHONE(011)233-1003　FAX(011)221-0481
URL:http://www.lilac.co.jp/maple/
E-mail:h-canada@f2.dion.ne.jp

were also Christians of different persuasions.

Since the last half of the 20th century, this has gradually begun to change as the newest Canadian citizens are from countries that have different sets of beliefs (Hindu, Sikh, Muslim, Buddhist), cultural values and skin colour. Under Canada's multiculturalism policy, they have been encouraged to safeguard their cultural and religious beliefs while at the same time being full-fledged Canadian citizens.

Under the Charter of Rights and Freedoms, they are demanding that the dominant Canadian culture accommodate their cultural and religious beliefs, going to court if necessary to obtain such rights: the right of Sikhs to wear the kirpan, their ceremonial dagger in public places such as schools, the right of Muslim women to wear the hijab or veil in public along with the right of Sikhs to wear their turban as members of the RCMP and other public organizations.

In the clash "dust up," conflict of different cultures, what is the future of Canadian culture? What weight should be given to the culture of the settler society (English and French)? What is the future of biculturalism in a multicultural society? What about Canada's flourishing regional cultures within this framework? In this presentation, I will try to address a number of these issues.

第126回 CANADA SCHOOL カナダ・スクール

講演 『日本にとってなぜ今カナダなのか』 ―一移民の視点から

講師：太田　徳夫氏（カナダ・ヨーク大学教授）

平成20年10月27日　かでる２・７にて開催
～日本カナダ学会と共催

【講師略歴】
1945年３月生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。サイゴン大学日本語科（科長・コロンボ計画専門家）、国際基督教大学、シートン・ホール大学（米国・フルブライト交換教授）、モナシュ大学（豪州）、ミシガン州立大学、ハバナ大学(キューバ)等カナダの内外にて日本語・日本研究の指導に当たる。
1984年からヨーク大学（カナダ）に勤務。現在日本語科主任教授。専門は言語学・日本語学・第二言語習得。訳書にレジナルド・W. ビビー（本年２月に来札、北海学園大にて講演）『モザイクの狂気―カナダ多文化主義の功罪』（南雲堂2001年）の他、論文多数。

前置き

今回浪田先生からお招きをいただきましたトロントのヨーク大学の太田徳夫です。今日のお話は２月にこちらで講演されたレスブリッジ大学のレジナルド・ビビー氏の「『モザイクの狂気』とその後」に続くものと考えて下さってよいかと思います。特に日本にとってカナダの実験とその結果が如何に大切かという点に絞ってお話ししたいと思います。初めにお断りしておきますが、私はカナダ研究の専門家ではないので、色々な統計やその解釈は専門家に任せることにして、一人の移民として、と言っても移民と言う感覚はまったくないのですが、自分の個人的な経験を通じてカナダ社会についてお話しすることにしました。私は、専門は言語学ですが、日本研究の方にも足を突っ込んでいて、主に文化研究・異文化間コミュニケーションに興味を持っています。最近はグローバル化の中で人がどのように多重のアイデンティティーを継続的に形成していくかという点に焦点を当てています。７月にジャマイカの首都キングストンにある西インド諸島大学で開催された2008年文化研究協会主催クロスロード文化研究学会で「アイデンティティーと国際化」という主題の部会を組織して、私の他に４人の発表者が色々なトピックについて話をしました。私は「宗教とアイデンティティー：内村鑑三・新渡戸稲造・ハムソクホン」という題でこの三人のキリスト者をアイデンティティーの面から比べて見ました。北海道のこの地は特に内村・新渡戸両氏との関係が深く、これも何かの縁かなと考えています。武田清子氏が著書「峻烈なる洞察と寛容－内村鑑三をめぐって」(1995年教文館出版)『札幌を源流とする平和思想－内村鑑三と新渡戸稲造をめぐって』という章で、両氏を対照させていますが、その最後の項でこの二人の思想家が今日の私たちにどのようなメッセージを残しているかを論じています。要点は次のようなものです。私が特に興味深く感じたのは、このモデルはカナダではないかということです。

冷戦後の世界へのメッセージ

- 正義・神の義の尊重
- 寛容・平和的共存
- 平和を持ち来たらす人の育成
- 多元的人類文化をつなぐ原理
- 自己超越の発想の堅持
- 人間の尊厳と人間の怖さを知る人間観
- 経済における社会正義の尊重
- 平和的共存・モザイク的共生の世界共同体

彼らが、明治・大正・昭和に訴えかけたものが、現代でもまったく色褪せていないどころか、色々な意味でのグローバル化が進んでいる世界にとって持続可能な方法をを示唆するものとして大きな感銘を受ける人も多いと思います。第二次世界大戦終結までの日本は、彼らが期待した方向とはまったく逆コースをとり、ご存知のような人材的・文化的・経済的・政治的に惨々たる敗北を招いたわけですが、現在の日本はどうでしょうか。「神の義」は外すとしても、戦後、特にアジアの諸国に対する日本の戦争責任をきちっと処理してこなかった日本は、激変する国際社会の中で、自分の殻に閉じこもろうとする孤立化・鎖国化的な風潮が強くなってきているように思われます。内村や新渡戸の弟子たちが書いた理想的な教育基本法が書き直され、イラクへの派兵や防衛庁の省への格上げなどに代表される憲法九条の完全なる空洞化、教科書検定の温存、など、政治に無関心で戦争体験のない戦後世代を基盤にした新保守主義の台頭、これは世界的傾向でもありますが、教育・家庭・社会の荒廃、人間関係の希薄化、例を挙げればきりがないほど、問題が目立ちます。もちろん、日本の優れた点、改善された点にも言及しなければ片手落ちになります。実情はあま

り芳しくないようですが、京都議定書に見られるような環境問題における日本のリーダーシップ、環境改善のための技術、海外への技術提携と援助、文化やスポーツ面での世界への貢献、など色々挙げられると思います。しかし、少子・高齢化社会、訴訟社会、多民族・多文化社会、の到来を考えると、日本の将来を危ぶむ人も多いと思います。レジナルド・ビビー氏の『モザイクの狂気』の日本語版の前書きと後書きに、この書は日本の将来に警鐘を鳴らし、日本にとってカナダの経験が非常に役に立つと書きましたが、これが今日のお話の基盤で、その思いはますます強くなっています。ビビー氏は前述書の中で、「個人主義」と「相対主義」の行き過ぎが諸悪の根源であるとばっさり切っていますが、これも日本社会に大きく当てはまると思います。カナダも日本もアメリカという巨象の影響下にいて、何とか自分のアイデンティティーを保とうとしてきました。

先日、ウォータール市でカナダ日本研究学会があり、非常に成功だったのですが、カナダ外交部の北アジア担当者が「カナダにとってなぜ今日本なのか」という題で話をしてくれました。私の話とは鏡像（ミラー・イメッジ）で、骨子はカナダと日本はお互いに学び合えるところが多いということでした。実際日本とカナダは色々な意味でよく似ていると思います。日本がカナダにとって第六番目の貿易相手国であることや、姉妹都市提携が非常に多いことなど、統計的なことには触れませんが、両国がいい経験、悪い経験から学ぶことが多いと思います。今日のお話はカナダのいいところだけ話すものではなく、カナダの間違いから日本が学ぶところがあることも強調しておきたいと思います。

カナダの理想主義を示す事例としてよく下記の項目が挙げられ、議論されてきました。

カナダの理想主義

- 実験国家
  - 二言語併用主義
  - 多文化主義
  - 権利と自由の憲章
  - 無料医療制度
  - 死刑廃止
  - 公立教育重視
  - 最低賃金
  - 青少年犯罪法
  - 老後保障
  - 均等政策
  - 政治的正しさ
  - 定年制の廃止
  - 同性結婚の合法化

このような理想主義を標榜するカナダを内側から見てみるとどのようなカナダ像が浮かび上がってくるでしょうか。

移民に開かれた社会

さて、カナダと日本についての一番大きな違いを一言で言えと言われたら、何と答えるでしょう。たとえば、日本で、ここにいる家内が「私は日本人です」と言ったら、皆さんは、奇異に感じられるでしょう(注)。日本では国籍と人種が重なっているのに対し、カナダでは、人種に関わりなく「自分はカナダ人です」と言えるわけです。日本の国際化・多文化・多人種化が叫ばれて久しくなりますが、日本ではまだこういう意識が変わっていないと思います。もちろんカナダは移民によってできた国なので、これは当然と言えば当然ですが、カナダでも、カナダ人と言うとイギリス系の白人のカナダ人を想起する傾向が非常に強く、今でもその影響が残っています。それでも、カナダはやはり移民に対して開かれた国であると言えます。私の教えているヨーク大学はカナダで3番目に大きい大学で、学生数も5万5千人います。構内にあるショッピング・モールを歩くと、東京の新宿の雑踏を思い起こさせるほどです。教職員も合わせると6千人以上います。私は24年前から日本語科の主任を任されてきました。その間、大学は私の色々な新しいプロジェクト—大学間交換協定・日本語能力試験・日本語弁論大会・遠隔教育・キューバでの教員研修など、を支援してくれ、その他にも責任のある仕事をさせてくれました。また、大学だけではなく、コミュニティーも同じように移民に大切な仕事を任せてくれるように感じました。

(注)カナダ・スクール会場には、カナダ人の奥様をご同伴されました。(事務局)

理事会の賞罰委員会

以前、学内選挙で理事会の賞罰委員会のメンバーに選ばれたことがあります。この委員会は、いわば、学内の最高裁判所で、各学部の賞罰委員会で処理できない事例、特に、手続き上に問題があった場合及び新しい証拠が見つかった場合だけを扱うものです。この委員会には教員以外に学生会代表も加わっています。委員長は回り持ちだったので、ある日私の番がやってきました。確か、学生が教員の部屋に忍び込んで試験用紙を盗んだと言うケースであったと記憶していますが、大学を代表して文学部副学部長、学生側は弁護士が弁論をしました。われわれ委員は両方の言い分を聞いて、中に入り協議をして、私が、最終決定を言い渡したのですが、その決定に関して、私ども教員に責任が生じるのではないかと心配になり、同席していた大学の弁護士にその旨尋ねると、その点は、自分たちが面倒を見ると言うので、ほっとした次第ですが、外国人である私にこんなに責任を持たせていいのかな、とこちらが心配になったほどです。因みに、私は、未だに日本国籍で、カナダ国籍を取っていません。理由は日本が二重国籍を認めていないからです。二重国籍を認めていない国を見てみると、大国意識の強い国が多いように思います。この点も日本政府に早く対応してもらいたいと思います。選挙権もない中途半端な状態で生活しなければならないと言うのは人権問題だと思います。特に、二重国籍を認めている国から来ている移民と比べると差別を受けているようなものです。それはさて置き、外国人にここまで責任を任せる国が他にあるかなと考えると、企業においては、状況はずいぶん変わっていますが、まず日本の大学ではあり得ないと思います。以前、ミシガンにいる時も、頼まれて大学の下級裁判所の判事をした経験がありますが、やはり、移民に対して開かれた国だなと感じました。

「日本を通じて異文化間コミュニケーションを学ぶ」コース

似たような経験はいくつかありますが、日系人の学会で、異文化間コミュニケーションに関する発表をした折、参会者の一人、大橋ベバリーさんと言いますが、話しに来て、これを是非高校教育に使いたいと言ってくれ、2年後に、10万ドルのグラント（助成金）を取ってくれ、高校では初めての学際コース「日本を通じて、異文化間コミュニケーションを学ぶ」というコースの開発をしたことがあります。これは、言語・歴史・芸術・美術・ビジネスなど7つのモジュールからなるもので、高校の教員6名を雇っ

てカリキュラムを書いてもらい、私がすべて監修しました。完成までに5年かかりましたが、後で、高校の正規のコースとして認められ、いくつかの高校で今でも教えられています。中国語版もアドバイザーとして手伝いましたが、こんな経験もカナダならではの経験ではないかと思います。確かに大学の教員と言う立場は一般の職業とは違うかもしれませんが、カナダにいると、自分が外国人であるということをあまり意識せずに仕事ができます。私が、大学で永久職を得ると、同僚の態度がころっと変わり、それまではお客さん的に扱われていたのですが、いい意味でも悪い意味でも、これからずっといる同僚として待遇され、ある日、つまらないことで、私に直接言わず、学科長に苦情を言いに行った同僚がいて、だいぶカチッときましたが、学科長は、あなたを普通の同僚として考えているからだよと言ってくれたので、なるほどと思ったものでした。

地域主義

トロントにいると、トロントがカナダだと思い込みがちですが、一歩トロントから足を踏み出すと、別世界と言ってもいいほど、移民の少ない環境に出くわします。ですから、トロントだけを見てカナダを語ることは出来ません。私どもは家族で色々な所にキャンプに行くので、たいていのカナダ人より、カナダの各地を訪ねています。オンタリオ州の70パーセントか80パーセントは一度もオンタリオを出たことがないと言われています。家内の出身地のウィニペッグに行くと、同じような現象があることに気が付きました。ウィニペッグの人も文化・芸術・スポーツなど、すべて一流のものを持っているので、他の所に行く必要がないと思っているようです。これがカナダの大きな特徴の一つだと思われます。各都市がそれぞれ孤立してその中にすべて備えているので、他との交流は必要ないという感じです。もちろん地理的にカナダは世界で2番目に大きな領土を持っている国ですから、こういう傾向は分からないでもないのですが、これが連邦政府のこととなるとやはり問題も出てくるわけです。ハーパー首相はカルガリー出身ですが、首相になってから、カルガリーで約束していた政策を実行しないので西部の選挙民の支持も失っています。またオンタリオはオンタリオで、連邦政府の議席の3分の1を占めているので、経済的にも政治的にもカナダの中心と言う意識が強く、他の州から顰蹙を買うことが多いです。御存知のようにケベック州はその次に影響力があるので、カナダの政治をますます複雑にしています。このようなカナダの地域主義は、カナダを考える時に大きな要因であると思います。連邦政治はその上に立った妥協の産物でもあるわけです。政治的色合いから行っても、西部は保守色が強くオンタリオは自由党への支持が強いです。

人種間の問題

トロントに焦点を当ててみると、移民、特に、可視少数民族(ビジブルマイノリティー)の数が、いわゆる白人カナダ人の数を上回っているという統計が出ています。以前、教育関係の学会で、高校の教師と話している時、白人の皆さんは可視少数民族から脅威を感じていると思うがと言うと、感じているのではなく、実際に脅威を受けているという答えが返ってきて、彼らがどのように感じているかがよく分かりました。少数民族に対する差別という問題も確かに根強く残っていますが、移民の側にも問題があることを指摘しておきたいと思います。これも大分以前のことですが、末の息子が、まだ高校生の時に、北ヨーク・コリージエートという高校に通っていました。その関係で家内がいわゆる父母会の会長の役ををもう一人の人と分担していました。ある日その会合で、トロント教育委員会の人種関係委員会の代表になってくれないかという要望がありました。私が、この地区は白人ばかりだから、非白人の自分にこの役をやらせて、皆さんの顔を立てる目論見ですかと皮肉ると、そうではなくて、99パーセント以上の親が白人だから、あなたのインプットが必要だと言われて、それならと引き受けることにしました。この地区は、トロントの北部地区で、ローズデール・フォレストヒルというような最高住宅街があるところで、経済的にも非常に富裕な地区です。図らずもトロント教育委員会の人種関係委員会の北地区代表となって4年間いろいろな会合に出ることになりました。ある日、公平(エクイティー)政策に関する会合があり、トロント教育委員会の上級管理職の採用基準が議題になりました。まず、中国人のコミュニティー代表が、現在トロントの人口の45パーセントが中国系であるから、45パーセントの上級職は中国系の応募者に行くべきだと述べました。次に黒人のコミュニティー代表が黒人の人口は25パーセントだから、上級管理職の25パーセントは黒人の応募者に行くべきであると言うのです。私はびっくりして、ちょっと待ってほしい、自分は、日系カナダ人を代表しているわけではないが、もし、日系カナダ人の優秀な応募者がいても、その人口が非常に小さいために職が得られないと言うのか、これは、公平政策ではなく割り当て政策以外の何者でもないと主張しました。その際、「不可視少数民族」'invisible minority' という用語を作って使いました。中国人と黒人の代表からはかなり冷たい目で見られましたが、会議が終わってから、教育委員会の公平政策部の代表が話しに来てくれ、よく言ってくれた、自分たちもまったく同意見だが、職分上会議では発言できなかった、ありがとうと言われました。また、ユダヤ人やベトナム人代表からも感謝され、「不可視少数民族」という用語を使ってもいいかと聞くのです。私は、もちろんどうぞと言いましたが、この時、ああこれが日系カナダ人の役割だなと強く感じたものでした。少数民族はそれなりに自分たちの役割があるもので、日系カナダ人は、第二次大戦中の強制収容所での経験から、カナダ社会に溶け込むことに専念したため、いわゆる白人カナダ社会からもかなり信用されているので、いろいろな衝突の調停役には非常に適しているように思います。ところが、日系三世の世代になると、非常に好戦的になり、対決姿勢をあらわにする人たちが目立つのは残念です。中国人や黒人のグループの中でも、非常に好戦的で、妥協する余地があまりないという印象を受ける人が影響力を持っているように見えます。すぐ差別に結び付けるのは簡単ですが、移民として他の国に住んでいる場合、権利ばかり主張しても埒が明かない場合があります。これは個人的な意見ですが、移民の中で、自国での衝突をカナダに持ち込んで、差別をしたり、攻撃しあったりするグループも目に付きます。それを見ると、移民の中にも多くの問題があることが分かります。政治・経済・文化的に背景の異なる移民で構成されている社会では、共通項を見つけるのがほとんど不可能です。私もカナダでいろいろなことに首を突っ込んでみて、初めて、なぜ二言語政策を取ったのか、これはイギリス系カナダ人のケベックとの妥協です、次に多文化主義、これは、後続の移民に対する対応です、そして、権利と自由の憲章、カナダでは、これ以外に共通項がないので、この憲章は、カナダの理想主義の頂点と言えますが、を掲げることになったかが分かるようになりました。権利と自由の憲章は、伝統的価値観と理想主義の溝を広げ、皆さんもご存知のように、マリワナ使用の合法化や同性愛者の結婚を認めると言う結果をもたらしましたが、未だに、それに対する反対の声も強いです。自由と権利の憲章を究極まで押し詰めると、これまでの伝統的価値観を一夜にして覆すことになってしまうので、例えば、同性愛を認めないカトリックや、イスラム教の人たちは、脅威と捉えています。教育の面でも、これまで父親の役割、母親の役割とされてきたものが、覆され、伝統社会の価値観をまったく書き換える準備が出来ているかどうか非常に不安なところです。定年制などに関

しても、年齢に対する差別として、オンタリオ州でも2年前に廃止が決まり、私もその恩恵を受けて、65歳で退職しなくてよくなりました。これなども、基本的には政府の経済的配慮—年金問題—が大分影響していると思われますが、表立っては、差別が理由です。私は大分前から、少なくとも、65歳になったら、公平な委員会で審査して、その人の進退を決めるべきだと言い続けていますが、組合組織が強いカナダでは、なかなか認められません。しかし現実問題として、教えることにも、研究分野でも、委員会の仕事などでも、ほとんど何もせず、高給を取っている教員がかなり多くいることを考えると、大学人のアカウンタビリティーの問題として、教員自身が自主的に決定しなければならない問題だと思います。

アカウンタビリティー

ここでアカウンタビリティーと言う概念を持ち出しましたが、それには理由があります。この言葉は、カナダに行って学んだものですが、頻繁に使われるので、興味を持って使い方を観察することにしました。レジナルド・ビビー氏の「モザイクの狂気」の中にも頻繁に出てくるので、翻訳をしているときに訳語をどうするか少々悩みました。現在日本では「説明責任」とかそのまま「アカウンタビリティー」として使っているようですが、一昔前の英和辞典では「責任」となっていて、レスポンシビリティーと同じ訳語になっていました。「説明責任」としてしまうと、一部の意味しか伝えられないので、「義務責任」と言うような訳語を作ってみました。もう大分前になりますが、獨協大学から頼まれて教職員全員に学生による評価について話したことがあります。当時の学長と話した時、文部省から学生による評価を導入せよと言われているが、どうしてよいか分らない、教員の中にも学生に自分たちの学識を評価させよと言うのかという反対の声も強いので、カナダではどうやっているか話してほしいと依頼されました。私は、「アカウンタビリティーと評価」という題にしてお話をしました。責任という言葉には、「責任を取れ」というような、誤りをしでかしたときに相手をなじったり、自分を責めたりする響きが強く、どちらかというと、道義的責任という色合いが濃いのに対して、アカウンタビリティーの方は、決められた仕事をきちっとする、何らかの決定を行う場合は、その理由や方法をはっきり説明する義務があること、などの履行義務を含んだ責任です。ですから、大学の教員でも、なぜ、どんな理由で、どういう風に教えているか、というような質問を受けたら、それを説明する義務があることになります。アカウンタブルというのは元々可算可能という意味なので、それが数的な評価の対象になるわけです。教師が、1年間の授業内容をちゃんとこなしたか、教え方はどうだったか、試験や評価は公平だったかというような点について学生が評価を下すことになります。日本でこういう考え方が育たなかった一番大きな理由は、契約という概念が育たなかったことにあると言えると思います。契約があってこそ、履行義務、成功度、失敗に対する責任という考えが出てくるわけで、物事を処理する過程における責任もこのアカウンタビリティーの要素となっています。日本文化では、人及び社会に迷惑をかけた時に関わってくる道義的責任という点に重点を置いていますが、アカウンタビリティーには感情の入る余地がない、義務履行・不履行の責任と言ってもよいかもしれません。私は、この言葉がカナダの風土を説明するのに非常にぴったりした言葉だと思っています。なあなあの甘えと言わなくても分かるという安心感のない移民社会では、先ほど述べた、自由と権利の憲章やこのアカウンタビリティーが共通の基盤として大切な役割を果たすことになるわけです。

異文化間コミュニケーションのギャップ

これに関連して、異文化間コミュニケーションのギャップを示す好例をお話ししたいと思います。バブルが盛んなころのことですが、トロント郊外に新しく出来たGMとスズキ自動車の合弁会社CAMIから依頼されて、日本に行くカナダ人研修員と日本から来る彼らの指導係の人たちに異文化間コミュニケーションのセミナーと訓練をするという仕事を授業の合間に4年ほどしたことがあります。私は、研修の前に特に日本から来た人たちと一緒に食事をしてビールなどを飲んで、知り合っておくようにしていましたが、ある時、2人の男性が、涙を流しているので、どうしたのか聞くと、日本で手取り足取りして教えた、研修員がカナダに帰って来た途端に、別の会社に就職してしまったと言うのです。私は、そのころの統計では、20パーセント以上の人が、そういう行動に出るということを話して、彼らの責任でないと説得しましたが、彼らは完全に自分たちの責任であると捉えていました。最近でこそ異文化交流がいろいろ話題になりますが、このような深いところでの相互理解がないとかなり誤解が生ずると思います。

タテの移民とヨコの移民

ここで少し移民の話をすると、まず、何世代かカナダにいるグループと新しく入ってきた移民との間に亀裂があることがあげられます。一昔前は、前からいる移民が新移民より優越感を持っていたきらいがありましたが、最近の移民は、特に教育もあり、技術も持っている人たちも多く、彼らは、昔の移民のように最下層から出発する必要がなく、横滑りでかなり高い位置の仕事を得る人たちです。私は、これをタテの移民・ヨコの移民と呼んでいますが、カナダには未だに新興国から来るタテの移民とヨコの移民が混在している状況があって、社会を複雑にしています。私はどちらかと言うと、ヨコの移民に属しますが、まず、先ほど言いましたように、移民と言う感覚がまったくありません。仕事でカナダに住んでいるだけなのと、どこに住んでいても住めば都と言う感覚です。この点、新興国から来ている移民は大分違います。まず彼らは、自分の国に帰ることをあまり考えていないこと、或いは多くの場合帰る祖国がない、それに反して、発展国から来ている人たちはいつでも帰る所があると言う違いです。それだけに、彼らは必死で生活していると思います。このように、移民社会は、複雑な問題を抱えています。カナダのこの豊富な経験は、日本にとって非常に有益だと思います。

大国主義を追求しない

カナダの大きな魅力の一つは、大国主義を追求しないことです。これを裏返してみると、カナダは英領植民地の時代から培われてきた、劣等感の所為であるとも言えるかもしれません。私個人としては、大国主義の国が大きらいなので、カナダの政治土壌が気に入っています。現在の保守党政権は、路線が大分ワシントン寄りですが、いずれ、中道を求める声に軌道修正を余儀なくされることでしょう。残念ながら、トルードー首相時代に打ち立てた、公正・中立、紛争の調停役と言うイメージは大分崩れてしまいましたが、それでもまだ、前の自由党政権がイラクへの派兵を拒否したりしたことを見ても、カナダが独自の政策を守ろうとする態度が見られます。軍隊も最小限必要な規模にとどめているのは、日本の保守政権が自衛隊の拡大を図ってきたのと比べて、基本的

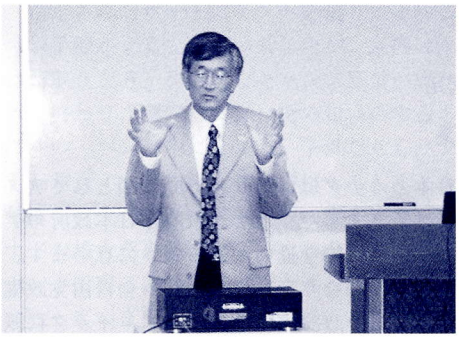
に大きな価値観の違いを感じます。大きな軍隊を持っている日本より小さな軍隊のカナダにいる方が安全に感じるのは私の偏見でしょうか。

多文化主義

よく知られている多文化主義政策に触れてみると、ビビー氏がモザイクの狂気の中で述べているように、文化相対主義の影響で、それぞれの文化のいいところを取り入れて新しいカナダの文化を構築するという努力がほとんど見られません。二世・三世の時代になると、カナダ化して、大分様相が変わりますが、移民のグループ間にほとんどコミュニケーション網がないことは、モザイクモデルの大きな問題だと思います。先ほど述べた高校での異文化間コミュニケーションのコースは、日本人の異文化経験をそれぞれの文化を基盤として学んでもらい、接点を見つけると言う目的があります。お互いの文化に関するかなりの知識がないところに多文化主義は育たないと思います。例えば、中国文化と言えば、中国料理、カリブ海文化なら、お祭りのカリバナ、ではまことに心もとない状況です。多文化主義のもう一つの大きな問題は、色々な対立する宗教が絡んでいることでしょう。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教以外にヒンズー教・シーク教、またそれぞれの宗教内での宗派の対立などが、移民の中に持ち込まれ、批判をしようものならすぐ、反何とかというレッテルを貼られ、命の危険さえ問題になることもある状態です。私のような無宗教の人間には、まったく無縁のことのように感じられるのですが、多文化主義政策の中では、文化相対主義の観点から、それぞれをあるがままに受け入れ、批判は避けることになっています。こういう環境では、いわゆるサイレント・センサーシップ（無言の言論統制）の圧力が強く、よほど勇気がないと、出来ないわけです。結局、モザイクを構成している一つ一つが、故丸山真男氏が使った「タコツボ文化」になっている印象を強く受けます。また、カナダがこれまでそうしたいグループの人達の自由と独立を守ってきたからだとも言えます。最近の例では、アルバータのハテライト・コミュニティーとカナダ政府の衝突があります。ハテライトの人達は、写真を取ることを禁じているので、これまでは運転免許証にも写真を載せなくていいことになっていましたが、最近、政府がその方針を変えて、写真を載せることを義務付けたために、ハテライトの人達は、われわれがカナダに移民してきた時、政府はわれわれの権利を保証してくれたのだから、これは約束違反であると主張するのです。この例からもよく分かるように、個と全体のバランスを保つのは容易なことではないと思います。ビビー氏が個人主義と相対主義の行き過ぎと看破した面はこういうところにも現れています。結果的にどうなるかというと、すべてを包摂するような非常に大まかな最大公約数的な枠組みを作り、すべてを相対化して、どの文化のどういうところがいいというような議論を切り捨てることになって、エクセレンス（最善）を求める志向が欠落してしまいます。教育でもその弊害が多く見られ、高校などでは、80パーセントの出来でAがもらえます。これでは誰が、もっと勉強して90パーセントの成績を取ろうと思うでしょうか。大学でもだんだんこの傾向が目立ってきて、妥協する教員も非常に多いです。因みに、私のところの日本語科では、Aは89パーセントから94パーセントまで、A＋は95パーセント以上としています。色々批判や苦情も出ますが、いまだに、エクセレンスを求める態度は崩していません。その結果、自画自賛ですみませんが、私共の日本語科はカナダでナンバーワンという評価をいただいています。全カナダ日本語弁論大会で、過去5年間連続最優秀賞者を出していることからもその成果が見てとれます。2年前に獨協大学で「全力投球の大切さ」という題で一般講演をしたことがあります。その折、参会者に皆さんの人生の中でどんな小さなことでもいいから、全力投球した経験がありますかと聞いたところ、手を上げた人は全員30以上の人達で、学生の中には1人もいませんでした。昔の日本文化では、全力投球は当たり前の価値観でしたが、現在は大分違うようです。それでもその後のレセプションで学生全員が今晩から全力投球で行きますと言ってくれたので、救われた気がしました。この話は、海外で生活・仕事をするためにはというコンテクストの中での話でしたが、新しい移民はやはり全力投球しなければ、生きていけないので、その活力にはすごいものがあります。特に、中国人・韓国人・フィリピン人と日本人を比べると、その差は歴然としています。私の所属している日本語・日本研究の分野を見ても、最近は中国人で大学の教授の地位を得る人が増え、日本人の講師がその下で働くという傾向が顕著に見られます。移民の社会では、個として強くなければ、また、貪欲でなければ、成功はおぼつかないので、彼らは全力投球で頑張っているわけです。私の友人の中国人のカルガリー大学の教授は、京都大学で日本古典の博士号を取り、カナダに来た時は英語がほとんど出来なかったにもかかわらず、数年でマスターし、カルガリー大学に採用されたということです。これでは、集団に依存しがちな日本人は太刀打ちできません。移民社会の活力は、やはりこういう優秀な人達が切磋琢磨している環境にあるのではないでしょうか。厳しい環境は、色々な成果を生みます。ぬるま湯社会が浸透している日本では、個の確立が非常に難しく、海外で力強く生活できる人の養成が難しいと思います。

国際化とアイデンティティー

カナダはよく世界の縮図だと言われますが、多民族・多文化社会の中でいかに自分のアイデンティティーを保つかということが、どの人種でも、移民の一世の一番の関心事であると思います。カナダに住んでいると、好むと好まざるとに関わらず、「カナダ的な価値観」—個人主義・多文化主義・文化相対主義など、の影響を受け、自分の生まれ育った文化との整合性を保っていかなければなりませんが、そこには、宗教・信条・家族・教育・階層など色々な要素が絡み合っていて、先ほども述べましたが、文化モザイク政策を楯に、孤立して自文化の温存を図り、他の文化・人種集団とはあまり接触をしない人達も大勢います。大きな問題は、一世世代と次の世代との亀裂です。親は子供たちに自分の文化を強要しようとしますが、カナダで育った世代は、カナダ人のアイデンティティーを身に付けているので、親子の間で、問題が起きる事例が多いのです。子供の結婚になると特に大変で、たいていの移民の親は同人種との結婚を望みます。私はよく学生に自分の子供の結婚の時にそれまで水面下にあった人種差別意識が浮上してくるという話をします。皆さんの場合も、自分の子供が外国人と結婚すると言ったら、どうするでしょうか。何年か前に、香港から来ている女子学生に日本語弁論大会のための調査で、アンケートを取らせたことがありましたが、非常に面白い結果だったので、ちょっとお知らせしましょう。この学生は、中国人の親達に、もし自分の子供に外国人と結婚したいと言われた場合、どの人種がより受け入れやすいかという質問をしました。皆さんの予想はどうでしょうか。私もびっくりしたのですが、アジア人の中では日本人がトップで、全体の中で白人と黒人が最下位でした。日本人の親に同じ質問をしたらどうかなと思います。実は学生時代に香港から来ている留学生と付き合って第二次大戦中の日本軍の暴行を理由に向こうの父親から大反対にあって、結婚できなかったという経緯があるので、世界がずいぶん変わったなという印象を受けました。カナダでは、異人種間の結婚は最近かなり増えているように見えますが、まだまだ立ちはだかる障害は大きいようです。三世、四世になると、まず親の言葉が話せなくなることが多く、以前カナダ政府は、継承言語（ヘリテージ・ランゲージ）政策に



よって、それぞれの言語・文化継承を奨励し、援助していたのですが、ヘリテージという言葉の使用を止め、国際言語教育というカテゴリーの下にたとえば日本語が教えられるようになり、現在では、それが基礎日本語という名前に変わり、ただ単に外国語の一つとして教えられています。その結果、継承言語教育はそれぞれのコミュニティーに委ねられ、やりたければ自分でどうぞということになってしまいました。私がアドバイザーとして20年間関係していた最後の継承言語日本語学校も３年前に閉校することになりました。日系人は第二次大戦中強制収容所に入れられた経験から、自分たちの子供たちをできるだけカナダ化し、カナダ社会に溶け込むよう奨励したので、日本語も文化もあまり強力に伝えようとしませんでした。その結果、三世の大半は日本語を話さず、日系文化の将来が危ぶまれています。それだけでなく、人種的にも日本人が多人種社会の中で消滅していく運命にあるようです。例えば、80パーセント以上の日系カナダ人女性が非日系人と結婚するという統計があります。因みに、オーストラリアでもキューバでも第二次大戦中に日本人移民が強制収容所に入れられ、キューバの日系人は人種的にもかなり現地に溶け込んでいます。こういう環境の中で、アイデンティティーの問題は非常に複雑です。日本では、保守系の人達が、無国籍のような日本人が増えているから、日本人をもっと日本化しろというようなことを強調するようになりましたが、彼らの日本人観に大きな問題があります。新しい日本人像ではなくて、古い日本人像を基にしているとしか思えないのです。日本では、日本人の間ではある程度世代間の相違として捉えることが可能ですが、日本に移民している人、帰化している人のことを考えると、自文化及び自言語の継承という問題が絡んでいるので、やはりアイデンティティーが問題になるでしょう。カナダは、原住民を除けば、もとをただせば皆移民なので、それぞれの人種グループが、どういう軌跡を辿ってカナダ社会を構成しているかは非常に興味あるテーマです。また、その地位をすでに確立した古い移民のグループと新しく入ってきた移民のグループとの間の確執や違いもカナダ社会の大きな要素の一つです。こういう社会に移民で行く場合は、自国文化に造詣の深いことが望まれ、またその良い所と悪い所を客観的に判断することが出来る必要があります。次の世代に自分が生まれ育った自国文化をそのまま伝えるのではなくて、良いところは温存し、他の文化からも良い所を取り入れ、新しいカナダ文化構築に寄与するという態度が大切です。端的に言ってこれが、カナダの多文化主義の要ですが、これをどうやって実践するかが大変難しいところです。私は色々な所で、多重アイデンティティーーアイデンティティーの多様化という話をしてきました。自分の場合を考えても、日本文化に培われたアイデンティティー、色々な国で身に付けた異なるアイデンティティーがあるように思います。これが異文化間コミュニケーションの基礎にもなるわけですが、私の学生にも、外国語・文化を勉強することによって新しいアイデンティティーを付け加えることを奨励しています。日本に留学させた学生を観察すると、人種の違いはあれ、かなり日本的なアイデンティティーを身に付けてくる学生が多いように思えます。それと同時に、カナダ人としてのアイデンティティーも強化されるので、我田引水ですが、外国語教育と留学は、新しいアイデンティティー獲得に欠かせない要素だと思います。そしてこのアイデンティティーは常に変化する流動的なものです。昔のカナダ人と今のカナダ人には大きな相違があります。もちろん地域差も大きいですが、カナダはまだ建国150年余（1867年）の国で、このような新しいカナダ文化で育った人達を見ると、やはり優秀な人も多く、日本のように歴史と伝統の長い国で育った人と比べて、遜色があるかというと、そんなことはなく、逆に過去のしがらみに囚われない柔軟で進取の気象のある若い人達が多く活躍しているように見受けられます。先週会ったストラットフォード市の市長は37歳でしたが、すごいやり手だなと感心させられました。残念ながら日本には、新しいアイデンティティーを構築してゆくと言う考えが希薄なように思います。保守の人達が考えている日本人像では新しい日本人はついて来ないし、グローバルなコンテクストで活躍できる日本人は養成できないと思います。確かに日本だけではなく、今の若者は、自国・自文化についての知識と理解に欠けています。こういう日本人を作った責任はどこにあるでしょうか。はっきり言えば戦後歴代の自民党の文教政策です。現代史はほとんど教えさせなかったり、批判精神を養ってこなかった、政策の付けが回って来ていると思います。それを若者たちの責任だけにするのは大間違いだと思います。ここにもアカウンタビリティー欠如が見られます。

少数意見も認められることがある

先日の学科長のメールによると、ヨーク大の助手・非常勤講師の組合がスト体制に入ったとのことでした。もう８年ぐらい前のことになりますが、同じ組合が、ストを決行することを決め、私共の教員組合もそれを支持することにしたため、理事会で、すべての授業を中止するという決定が出されました。私は、ストの理由が非常にばかばかしいものであったこと、語学のコースで１ヶ月も勉強しなかったら、学生は習ったことをほとんど忘れてしまうという理由で、ストを支持していませんでした。私は基本的には労働者の権利を守る労働組合運動を支持していますが、この時は、学生の将来・学業・ストの後遺症などを考えて、板ばさみになりました。それでどういう対応をしたかというと、まず学生にアンケートを取り、授業を継続してほしいかどうかを調べました。結果は90パーセント以上が継続してほしいと回答しました。またストを支持して、クラスに出席しない学生には、オン・ラインの教材（自習用教材が完備しています）を使って自宅で勉強すること、質問がある場合は、教員にメールで連絡することを指示し、授業を継続することにしました。その間、学科長を通して、大学の理事会に言語のコースだけ特例で継続を認めてもらうように働きかけましたが、認められなかったので、学科長も理事会の決定には従わなければならない、短期間でもいいから授業を中止するようにと圧力をかけてきました。私は、今更引き下がるくらいなら、初めから、授業を継続するようなことはしないと、突っぱねました。他の科の同僚の中にも、民主主義の多数決で決まったことだから、仕方がないのではないかという人がいました。私は、多数が間違えることがある、その場合に少数意見がその間違いを正すこともありうる、それも民主主義の精神だと反論しました。こんな状況で、しばらくは授業を続けていたのですが、こちらの趣旨が分からない２、３人の学生が学部長に抗議文を送り、太田が授業を継続しているのはおかしいと訴えたらしいのです。それまで私の授業継続に目をつぶってくれていた学部長室もほうって置けなくなり、副学部長の１人が、これは大学の理事会が決定だから、選択の余地はない、授業をすぐ中止するようにという問答無用の高飛車なメールを送ってきました。そして、すぐ会いに来るようにと書いてありました。私は、問答無用ならなぜ会いに行かなければならないのか疑問に思いましたが、そのあまりにも高圧的な態度に、徹底抗戦の構えをとることにしました。それで、

授業の最高の質を保つこと及び学生の福利を最優先し、大学の決定は、自分の最優先リストにも載っていないこと、クラスに来ない学生がオンラインで自宅学習できること、質問があれば講師にメールで聞くことができること、90パーセント以上の学生が授業継続を望んでいること、３ヶ月も授業を中止したら、授業のレベルと質を保つことができないことなど、を理由にしての戦いを想定して、副学部長室に乗り込みました。すると、どうしたことでしょう、女性の副学部長は、非常に丁重に対応してくれ、こちらが、開発したウエッブの自習用教材などを見せて、上述した点を含めて、全て起き得る問題をカバーしていることを示すと、非常に感心して、自分はこのようなコースを見たことがない、私もあなたのコースを取ってもいいかなどと、お世辞も出るほどで、けんか腰で出かけたこちらも拍子抜けしてしまいました。一応全部説明して、これであなたに私のコースの継続を認めるための材料を十分にあげましたかと聞くと、もう一つだけ要望がある、ウエッブのあなたのスケジュールを見ると最後の方に自習と書いてあるが、それを、指導学習に変えられないかと言うので、まったく問題ないとこちらも妥協して、結局授業継続が正式に認められることになりました。私も、副学部長の態度のあまりの変化にびっくりしましたが、これを学科長に報告すると、彼も驚いて、自分は学部長室を代表して言っていたつもりなのに、後ろを見たら、その支持がなくなっていたと冗談を言っていました。多数決で決まったことだからと言った同僚も、結局あなたが言っていた民主主義のルールが機能したねなどと負け惜しみを言っていました。実は私も狐につままれた気持ちでしたが、あることを思い出しました。副学部長にけんか腰で会いに行く前日、ばったり当時の学長に会い、日本語の授業を継続している旨を話すと、「知っている、非常にありがたいと思っている」と言われたのです。これは憶測に過ぎませんが、学長も私の同僚の教務副学長も日本語科が非常に成果を収めていること知っており、また、日本語科が以前かなり学長の手助けをしていたので、この上層部から、副学部長に圧力がかかったのではないかと想像しました。「異文化間コミュニケーションと交渉」という題で話す時に、この例をよく引用しますが、まず、あらゆる角度から考えて準備すること、相手に自分の側の反対者を説得するのに使える材料を提供すること、ある程度の妥協をすること、不断の努力と成果などの大切さについて言及します。うれしかったことは、この結果、学生達から絶大な信頼と支持を受け、この年の学生から優秀な学生が輩出しました。自分たちのために大学と戦ってくれたと言うことで、ずいぶん尊敬してくれました。他の教員の中には、自宅や他の場所で授業を継続した人達もいたようですが、公式に授業継続が認められたのは私だけだったようです。組合の幹部からは、スト破りのように思われたでしょうが、少数意見が通った一つの例として、私も戦い甲斐のある経験としてよく覚えています。

ここでカナダの問題点をまとめておきましょう。日本との共通点がかなり浮き彫りにされていると思います。

カナダの問題点

- 移民の急激な流入による弊害
- 地方主義と連邦主義の確執
- 米国の影響
- 多文化主義の弊害
- 環境汚染と破壊
- 教育の荒廃
- 資本主義原理の徹底化
- 理想主義の空洞化
- 少子高齢化
- 労働力不足
- 未婚化
- 離婚率上昇
- 権利と自由の濫用

アメリカとの関係

ご存知のように、日本とカナダはアメリカの同盟国としてアメリカの影響を大きく受けてきました。カナダ政府と日本政府のアメリカ政府に対する政策に基本的な違いがあるように思います。もちろん政権によって政策がかなり変わりますが、全自由党政権のクレチェン首相が、アメリカ政府の圧力に屈せず、イラクに派兵しなかったことなど、故トルードー首相の政策を久しぶりに髣髴とさせるものでありました。最近の保守党ハーパー政権は、ブッシュ政権のカナダ版を目指していましたが、オバマ氏が大統領になったら、どうするのかなあとこちらが要らぬ心配をしてしまうほどです。もちろん、アメリカがいまだに世界第一の経済大国で日本が第二ということで、日本の立場とカナダの立場はかなり違いますが、日本はアメリカに対して、もっとはっきりと自国の立場をはっきりと言えるのに、常にアメリカに追随しているように見えます。今回のサブ・プライム・ローンの問題を見ても、私は、このような仕掛けを売り込んだことは犯罪だと思っていますが、レーガン政権から始まった自由化の残滓で、友人の元銀行社長の話では、カナダでは政府に規制されているので、このようなスキームは不可能だとのことで、まだるっこしいこともよくありますが中道を行くカナダの良識ある政策に感心しました。

カナダの自然－我が家の熊物語

話が少し堅くなりましたので、最後に、我が家の熊物語をお話しして今日の講演を終わらせたいと思います。北海道とカナダはよく似ていると言われますが、熊が出る点も共通していると思います。もう20年以上前になりますが、ミシガン州立大学の大学院にいるある夏、家内と４人の子供たちを連れて、６週間のカナダ西部横断のキャンプ旅行に出かけました。途中で、家内の親戚や友達の家に泊まったり、キャンプ場でテントを張ってカナダの広大さを満喫しました。古いバンを持っていたので、後ろを子供が寝られるようにして出かけましたた。アルバータ州に入るまでは非常に平坦な道路を毎日何百キロと走り、それこそ道端に生えている木やすれ違う車の数を数えるくらいが、気を紛らわせる術でした。エコー渓谷というところで、大地が切断されているのは印象的でした。カナディアン・ロッキーではいくつか温泉巡りをして楽しかったです。

家内は、子供のころからキャンプ旅行には慣れていて、４人の子供の面倒を見ながら、てきぱきと、物事を片づけてくれるので助かりました。ロッキーに行く前から、熊が出るから気をつけるように言っていました。私は、半信半疑でしたが、一番大きなキャンプ場を選ぶことにしました。確か、キャンプサイトが350～360はあるロッキーでは最大のキャンプ場であったと記憶しています。ゲートのところで、女性の係官（アメリカでは全て男性だったので、目新しく感じました）に、家内が熊が出ると言っているが、本当かとたずねると、彼女曰く、「一生に一度でいいから、奥さんの言うことを信じなさい。」それでも、私は、キャンプ場にいる大勢の人を見ながら、まさかーと思っていました。

指定されたサイトにテントを張り、そのころまでには、私もだいぶ手際がよくなっていましたが、家内は夕食の支度、子供たちは薪取りなぞ、典型的なキャンプ風景が繰り広げられました。食事も終わり、家内は、食べ物の匂いのするものは、すべてきれいに洗い、バンの中にしまい、子供たちもバンの中に寝かせ、標高千五六百メートル以上の山中はしんしんと冷え込んできましたが、私はキャンプファイアーの前に座り、コーヒーを飲みながら、カナダの雄大さを満喫していました。夜の11時ごろ、家内はすでにテントで寝ており、私は透き通る夜空の大きな星などを見て感慨に耽っていました。

すると、突然、バンの陰でがさっという音がし、ふと目を向けると、中型の黒熊が、こちらを見ているのです。「青天の霹靂」、いや、「闇夜の烏」、とでも言った方がい状況でした。夕方子供たちの作った、熊除けの缶からに小石を入れたのは、離れたテーブルの上にあり、とっさに、死んだふりをすることも考えましたが、既に時遅し。それでも、キャンプファイアーが赤々と燃えているし、こちらはその前で椅子に座っていたので、ここまでは来ないだろうという少々の余裕はありました。ところが、です。熊はどんどんこちらに向かって来るのです。私は、飲みかけのコーヒー・マグを握ったまま硬直しました。まさにフリーズです。私も熊の方を見ないようにしていましたが、熊の方も、目を合わせないで近寄ってくるのです。昔の剣豪同士の果たし合いというような殺気が頭をよぎり、はっと思った瞬間、半ズボンをはいている私の膝小僧を熊の毛がザーッとこすっていきました。私とキャンプファイアーの間、約50センチのところを熊は、堂々と通って行ったのです。その間目線は一度も合わせず、でしたが、まさに熊の示威行為と思われました。

その時までは、それほど恐いという感じはなかったのですが、熊が次に家内の寝ている、テントの回りをくんくんかぎ出した時には、焦りました。しかし、さすが、キャンプなれしている家内で、食べ物の匂いはまったくなかったので、熊はあきらめたように暗がりに消えて行きました。その時すぐ家内を起こして熊の報告をしたかどうかは定かではありませんが、次の朝、近くで、「熊だ。熊だ。」という大騒ぎが聞こえました。因みに、キャンプ場で餌を漁る熊は、3回、百キロぐらい離れた所まで連れて行き、それでも戻ってきた場合は殺すとのことでした。元々自分のシマなのにと可哀相な気もしました。

普通なら、これで話が終わるところですが、そうではなかったのです。3日後にこのキャンプ場を離れ、ヴァンクーヴァーに向かったのですが、途中で、同じキャンプ場で、2人の男性が熊に襲われ、1人は片目を失い、もう1人は片腕を失うというニュースを聞きました。家内の話によると、子熊を連れている母熊は、人が子熊に餌をやったりしていると、狂暴になるそうですが。私の出会った熊は、あうんの呼吸が分かっていたような気がします。

これが我が家の熊物語ですが、日本ではなかなか経験の出来ない経験でした。因みに、この話は、3年生用読解教材として日本語科のウエッブに載せてありますが、一番人気のある教材の一つです。

まとめ

終わりに、日本がカナダの経験から学べる分野を考えて見ますと、次のような分野が考えられると思います。

- 多民族・多文化社会
- 偏見・差別の少ない社会
- 公正・公平・平等な社会
- 人権・自由の擁護
- 個性のある人材育成
- 非大国主義
- 最低限の軍事力
- 中立主義的な国際外交
- 包括的基本医療制度
- 社会保障制度
- 若い世代の登用
- 政権交代

尻切れトンボになったかと思いますが、本日はご清聴誠にありがとうございました。個人的なお話を通じて、カナダを身近に感じていただくことができましたら、幸いです。

第127回 CANADA SCHOOL カナダ・スクール

講演「カナダ人としゃべらNight Vol. 4」

講師：ダーン・ピーンさん

（札幌在住　英語講師）

平成21年2月27日　ホテルオークラ札幌「Maple」にて開催

第127回カナダ・スクールは、ホテルオークラ札幌 「Maple」の間で、札幌在住のカナダ人、ダーン・ピーンさんを講師に迎え、「カナダ人としゃべらNight Vol. 4」と題して少人数の茶話会形式で開催致しました。

ダーンさんには、通訳なしでご自身が生まれ育った州や町のお話などを含めて、わかりやすい英語でお話しして頂きました。またカナダの地域産業、観光、今後の問題点など、私たちの知らないカナダについてもご紹介いただきました。先生からのメープルクッキーを頂きながら、カナダの文化に触れ、参加者からも活発な質問や意見が出て、楽しくなごやかな交流の場となりました。前回同様、次回を期待する声も多く聞かれました。来年度も定期的に開催していく予定です。